慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	学を楽しんだ人
Sub Title	Souvenir of the late Prof. Okui
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.11/12 (1965. 12) ,p.1115(13)- 1117(15)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奥井復太郎博士追悼特集 追悼の辞
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651201-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥井教授はまた勝れた教育家であった。その卓抜な識見は、特に本塾塾長となられてから遺憾なく発揮された。まず特筆すべきことは、本塾百年祭とその記念事業を大成功裡に遂行されたことであろう。日吉記念館、日吉第四校舎、三田南及び西校舎などの建設整備によって学園の面目が一新されたことについて、奥井教授の名を忘れることはできないであろう。その間我国政治運動史上、未曽有の安保闘争に当面されたが、よく対処、学生をして、その向う道を誤まることなからしめた教育家としての才腕は高く評価されてよいであろう。

更に忘れてはならぬことは、同教授が、ハーバード大学と提携してビジネス・スクールを建設し、わが国における経営者再教育の事に先鞭をつけられたことである。更に奥井教授の活動は、国民生活研究所や通信教育等の多岐に亘って目覚しいものがあった。

教授の逝去は、学界、教育界にわたり、ひとり本塾の取返し難い損失であるばかりでなく、我が国にとっても一大不幸であろう。

目を閉じれば教授の温顔髣髴として、未だに教授の他界を信ずることが出来ぬ。

御冥福を祈る。

学を楽しんだ人

寺尾琢磨

奥井さんといえば、いうまでもなくわが国における都市論の草分けであり権威であるが、最初のころはラスキンやモリスの芸術的社会理論に心酔していた。彼が都市論の講義を開始したのは昭和二年、経済学部にはじめて都市経済論なる講座が設けられたときで、それも当時の学部長堀江帰一先生の命令によったものらしい。とはいえ彼が助手時代すでに都市論に関心をもっていたことは、大正十二年、当時まだ助手だった野村さんが留学生として渡欧するときの告別講演会で、彼が前座として「城壁を囲らした都市」と題する講演を試みたことでわかる。それは、ヨーロッパ中世都市に関する考察だったが、しかし都市を論ずといっても、今日の都市論とはほど遠い懐古的・美学的、すなわち矢張りラスキン張りの内容だったと記憶する。もっともこうした傾向は、のちのいわゆる奥井都市論の特徴たるばかりでなく、奥井さん自身の一生を貫く特徴でもあったのである。ちなみにそのときの野村さんの演題は「経済学の Leitende Idee（指導理念）」という大きなもので、むずかしい哲学論をぶったのち曰く「それが何であるか、わたしには判らない。判らないからヨーロッパまでゆくのであって、判っていればゆく必要もあるまい」と。われわれ一同、狐につままれた気もちで退散したものである。

奥井都市論については、専門外のわたしの云々すべきものではないが、昭和十五年の大著「現代大都市論」は――これは

彼のほとんど唯一の著作だが――二十五年を経た今日、少しも輝きを失っていない。否、一層の輝きを加えているとさえ言えよう。住民を窒息せしめている今日の巨大都市の猛威は深刻な社会問題だが、彼は当時すでにこれを洞察し、理想都市の建設を論じているが、それが今日のいわゆる社会開発の見地に立っていることは注目に値する。都市開発に特に必要なものは豊かなビジョンである。技術論に流れ易いこの問題を、始めから人間生活の観点から採り上げた彼の功績は正に先駆的といわなければならない。終戦後彼がいくつもの都市の再建に直接にタッチしたことは誰でも知っているが、いつも当局者のヴィジョンの貧弱さに閉口していたようである。

義塾創立百年祭を塾長として迎え得たことは、恐らく本懐の至りだったと思うが、卒直に言って塾長という煩雑な役目は彼には適当だったとは思えない。数限りない夢は聞かされたが、それを実現する計画的・事務的裏づけは恐ろしく素朴だったと言ってよかろう。わたしがいつも奥井さんは経済学者というよりは、社会学者であり、むしろ文学者だといったのはこの意味である。

あれだけの学者で、またあれだけの人格者でありながら、遂に後継者を養成し得なかったことは不思議だが、わたしはこう考えている。彼は生れながらの名人気質で、自分が興味を感じたことは、他人もまた同じと即断し、ゼミの学生達など、めいめいのテーマにはお構いなく、奥井さん自身の研究テーマのお手伝いに動員されたものである。こうしたやり方は、テーマや方法が偶々学生の好みと一致した場合には、恐らく最も理想的な効果を生むであろうが、そうでない場合には折角芽生えた自発的研究心をつみとってしまう惧れがある。奥井さんの場合は、結局自分だけ独走し、学生は遂にとり残されてしまったわけで、折角の善意と努力も予期された実を結ばなかったといえよう。もちろん小古間君や佐藤君のような優秀な学究の出たことは事実だが、残念ながら彼らは塾には残らなかった。奥井さんの急逝によって講座までが欠けてしまうとすれば惜しんでも余りあることである。後継者の養成はわれわれ教授にとって最重要な義務の一つだが、これには善意と努力だけでなく、更に自分自身を捨てる心構えの必要なことを、若い教授や助教授の諸君が心に銘記して頂きたいものである。

だが奥井さん自身としては恐らく悔いのない一生を送ったといえよう。都市論における奥井理論は独自の地歩を確立したし、更にたとえ本人の希望ではなかったにしても、その就いた塾長、ビジネス・スクール校長、国民生活研究所長等の要職は、誰でも就ける地位ではない。また仕事とは直接の関係はないことだが、奥井さんの家庭ほど和かな家庭をわたしは知らない。大勢のお子さんに恵まれ、いつも文字通り和気藹々、一緒になって遊んでいる姿は、父親というよりは大きな坊やか、せいぜい兄貴といったところであった。彼の別名「あんちゃん」の由来を気賀健三君は「どういうわけか知らない」と言っているが、これは彼の甥が彼をつかまえて「おじさん」という代りに、「あんちゃん」と呼んでいたからである。それはもちろん「兄さん」の意味で、わたし達にとっても、そして恐らくお子さん達にとっても、彼はいつも「あんちゃん」だったのである。

奥井さんの人柄については、なんといっても四十数年の交友だから、思い出せばきりがないが、既に度々の機会に書いたり喋ったりしたので、ここでは割愛させていただこう。唯一つ言いたいことは、学問を、あるいはもっと広い意味で知識の吸収を、仕事としてではなく、むしろ道楽とした彼のような学者は、もう滅多には現われないだろうということである。そうしたタイプはあるいは既に時代おくれかも知れないし、また前述したような欠陥をもち易いかも知れない。しかし余りにも利口な学者の氾濫する今日、悠々たる白雲にも似た彼の如き人物を失ったことを、わたしは心から淋しく思っている。